

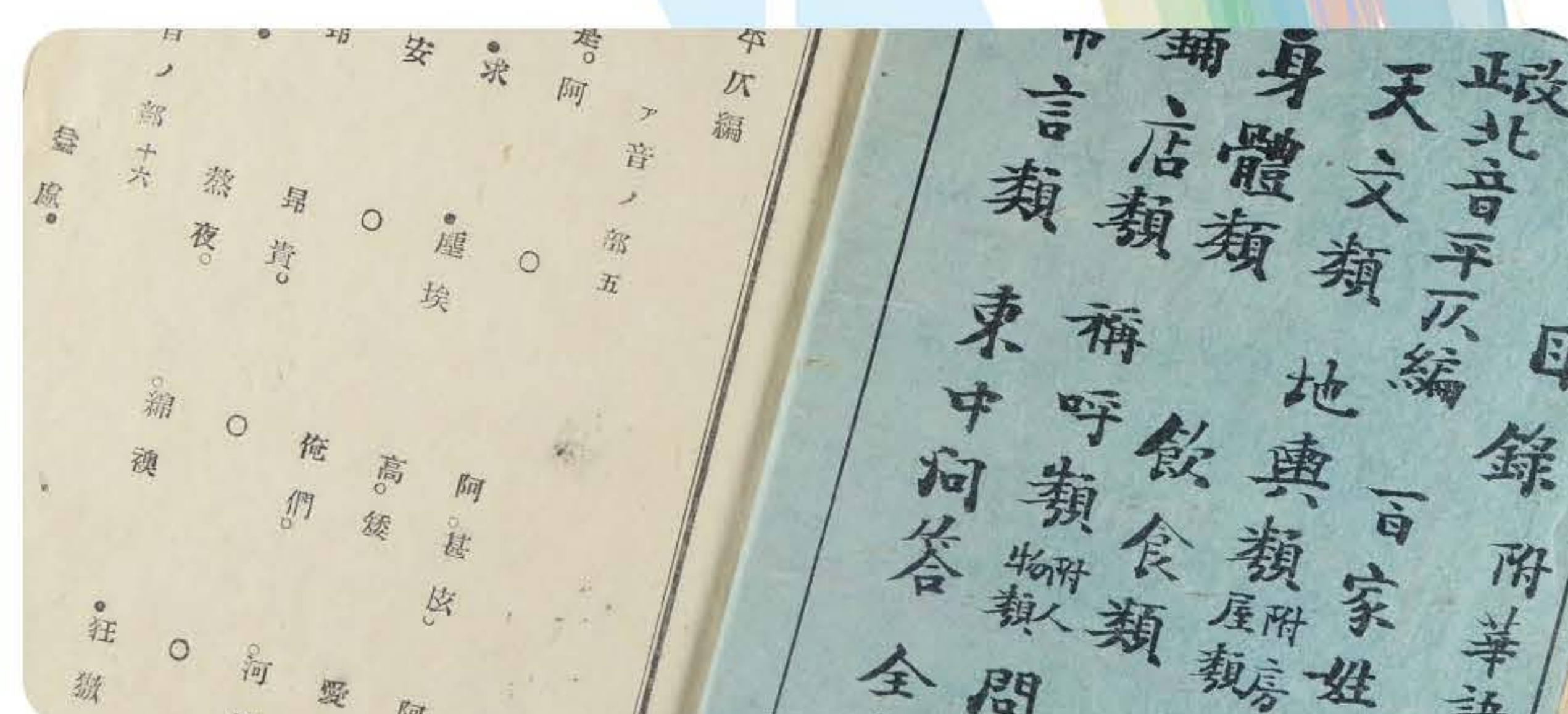
CONTENTS

センター長挨拶	P2
活動報告	P3
研究班別活動レポート	P4
バチカン図書館調査報告	P6

オープン・プラットフォームが
切り拓く新たな人文知の未来

言語交渉研究班

-Language contact-



ユーラシア 歴史文化研究班

-History and Culture of Eurasia-

関西大学
アジア・オープン・リサーチセンター
(KU-ORCAS)センター長

二階堂善弘

2022年度から関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(Kansai University Open Research Center for Asian Studies: KU-ORCAS)のセンター長に就任いたしました。

KU-ORCASは、2017年度の文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」の採択を受け、開設されたものです。関西大学のブランドである研究機関のひとつとして、東アジア研究を推し進めていく組織となります。

これ以前から関西大学においては、2007年に採択された「グローバルCOEプログラム」、2011年に採択された「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」を踏まえて、様々な漢籍文献データベースなどを導入しております。さらに、泊園書院の資料や、関西大学保有の貴重資料などのデータベース化を行いました。そういった積み重ねもあり、東アジア関連では、KU-ORCASは、日本における有数の電子文献データベースや電子ツールの保有機関となっています。そして、情報化のノウハウも蓄積してまいりました。

これまでのプロジェクトには、研究員、またはプロジェクトの構成員として、すべてに参加させていただきました。

また、個人的にも1990年代から、アジア研究における情報化については、継続的に訴えてきました。ただ、やはり世界に比べて、日本の人文学の情報化



は遅れているという状況です。この状況を改善するためにも、さらに情報化の有用性について、KU-ORCASが主導的に訴えていく必要があると思っております。

さて、今年度における当センターの活動としましては、以降のページで諸々ご紹介させていただくことといたしますが、2023年度の展望といたしましては、当センターを「デジタル時代の東アジア文化研究拠点」とすべく、文部科学省への「特色ある共同利用・共同研究拠点」申請を終えており、「①デジタル・ヒューマニティーズによる東アジア文化研究を推し進める。②大学院生や若手研究者のデータ・サイエンスへの対応を深める。③外部のデジタル・ヒューマニティーズ研究の取り込みを行う。④東アジア研究のハブ拠点となるプラットフォームを構築する。」という4つのポイントに重点を置いて推進していく予定をしております。

申請の結果の如何に関わらず、内外の研究機関と研究者をつなぐハブ拠点を目指し、日本の東アジア研究をリードする協力体制を築くことは、KU-ORCASの使命であると考えております。今後もKU-ORCASは、社会に対して門戸を開き、より多くの人々がオープンに利用できる体制を整えていく所存でございます。また、広く東アジア研究に資するための組織として活動してまいりますので、多くの方々にご理解とご協力をお願いできれば幸いです。

2022

- 7月22日(金) KU-ORCAS学術講演会
座談会「近世・近代における大坂の芸能と絵画の特徴」
- 7月30日(土) 第1回KU-ORCAS研究例会(第2回東西学術研究所 研究例会)
- ユーラシア歴史文化研究班 -
- 9月19日(月) クラウドファンディング事業 バチカン図書館現地調査
~23日(金)
- 9月24日(土) 第2回KU-ORCAS研究例会(第3回東西学術研究所 研究例会)
- ユーラシア歴史文化研究班 -
- 9月28日(水) 東西学術研究所 言語研究班の学術座談会
- 10月28日(金) 第3回KU-ORCAS研究例会(第4回東西学術研究所 研究例会)
- 言語交渉研究班 -
- 11月26日(土) 第4回KU-ORCAS研究例会(第6回東西学術研究所 研究例会)
- ユーラシア歴史文化研究班 -
- 12月17日(土) 第5回KU-ORCAS研究例会(第7回東西学術研究所 研究例会)
- 言語交渉研究班 -



2023

- 1月20日(金) 第6回KU-ORCAS研究例会(第10回東西学術研究所 研究例会)
- 言語交渉研究班 -
- 1月30日(月) クラウドファンディング事業 バチカン図書館現地調査
~2月3日(金)
- 2月14日(火) 国際シンポジウム「イタリアを中心とするヨーロッパ現存東アジア文献資料の整理とアーカイブス化」
2022年度 KU-ORCAS言語交渉研究班及び国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))共同開催 22KK0005
- 2月16日(木) 関西大学東西学術研究所 ICIS国際シンポジウム
「東アジアの漢字文化と言語・伝統」 後援: KU-ORCAS
- 3月10日(金) KU-ORCAS研究集会「言語研究とデジタルヒューマニティーズ」
- 3月12日(日) 超初心者向けテキストマイニング入門ー講演と実習ー
2022年度 KU-ORCAS言語交渉研究班及び国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))共同開催 22KK0005
- 3月24日(金) 研究クラウドファンディング事業 成果報告会



研究代表者
関西大学
外国語学部 教授

奥村 佳代子



2022年度 言語交渉研究班活動報告

2022年度は、3回の研究例会に加え、研究集会を開催することができた。

研究例会では、北京官話資料に関する諸問題、女性の視点による中国語、『海録』『海国図志』の版本、最早期プロテスタント系漢訳聖書、近世日本における漢字の変容、「知識」の系譜、石濱純太郎と東洋言語学者たち、『元典章』における漢語とモンゴル語の接触、渡部薫太郎の満洲語学など、言語資料及び言語交渉の事象を様々な角度から捉えた研究成果が報告された。また、総合地球環境学研究所名誉教授長田俊樹氏は「石濱シュレー考—その課題と問題点」と題して講演した。

研究集会ではDHを中心のテーマに据え、KU-ORCAS全体の課題として発信した。特に関西大学所蔵「篆隸万象名義近世写本」「廣瀬本万葉集」を事例としたDX化に関する報告は意義深かった。

第5回KU-ORCAS研究例会 「『海国図志』版問題新論」

田野村 忠温 大阪大学大学院人文学研究科 教授

19世紀中葉、アヘン戦争の直後に海防思想に基づいて編まれ、世界に関する知識を中国そして日本にもたらすのに大きな役割を果たした魏源の大規模な世界地理著作『海国図志』の版の種類の問題については従来多くの議論や記述があるが、まったく不正確な水準の理解にとどまっていた。本発表では、同書の50巻本にも100巻本にも従来未知の版区別があることを明らかにし、同書の改版過程における各版の位置付けを論じた。



第5回KU-ORCAS研究例会 「『知識』の系譜」

沈 国威 関西大学外国語学部 教授

古代中国では、知識は六芸からなるが、西洋では、文字の介在の有無によってliteratureとartに分けられていた。そして近代に入ると、literatureはbelles-lettresとpositive scienceに分化し、artは、useful artとfine artに分かれた。その後、さらにpositive scienceとuseful artが融合し(科技)、belles-lettresとfine artは一体化した(文芸)。西学東漸は、東アジアの知識体系を西洋仕様にフォーマットし直したと言えるが、その受容のプロセスに、最も大きく貢献したのが西周であった。本発表は、東アジアにおける西洋の近代的知識体系の受容史を西周の訳語によって再現する可能性を論じた。



第6回KU-ORCAS研究例会 「渡部薫太郎の満洲語学—満洲文字の転写とその発音を中心に」

松岡 雄太 関西大学外国語学部 教授

日本の満洲語学史上、大正から昭和初期にかけて活躍した重要人物の一人である渡部薫太郎が残した満洲語に関する著作のうち『満語文典』と『満洲語文典』の二種を対象に、当時の満洲語の読み方が、現在多くの研究者が満洲文字の転写に用いるMöllendorff式のローマ字表記をそのまま読むのとは部分的に異なっていたことを論じた。



第6回KU-ORCAS研究例会 「石濱純太郎と東洋言語学者たち—『大東亞語學叢刊』をめぐる」

玄 幸子 関西大学外国語学部 教授

「大東亞語學叢刊」(羽田亨監修 朝日新聞社出版)は石濱純太郎・川崎直一共編の当時の大東亞共栄圏の言語を対象とした語學叢刊である。当初21、2種の言語について出版する予定であったが、宮武正道著『マレー語』(1942年4月)、高橋盛孝著『樺太ギリヤク語』(同年10月)の二冊のみ出版され、後続しないまま立ち消えてしまった。この間の石濱純太郎をめぐる当時の東洋言語学斯界の状況を川崎直一の石濱宛書簡を通して検証した。



研究代表者
関西大学
文学部 教授
森部 豊



2022年度 ユーラシア歴史文化研究班活動報告

2022年度のユーラシア歴史文化研究班は、3回の研究例会を通じ、金石資料や非典籍史料を利用し、ユーラシア各地の歴史の諸相を浮かび上がらせる研究成果を発信した。

第1回は、池尻研究員「摂政テモ・ホトクトによるサムイェー僧院修繕と清朝からの扁額賜与」、毛利研究員「『靖康稗史』偽書説一本文の検討を踏まえて」そして森部研究員「唐代後半期のソグド系武人の系譜とその活動」、第2回は吉川研究員「18世紀後半～19世紀初頭の北部ベトナムにおける皂隸と村落」、篠原啓方研究員「資料紹介：故井上秀雄先生所蔵拓本について」、藤田研究員「中国木簡筆跡研究の課題と展望」、そして第3回は西田研究員「西チベット岩石碑文研究の現在」、澤井研究員「オスマン朝治下のイスタンブールにおける居酒屋にかかわるカラマン＝トルコ語墓碑」吉田研究員の「ソグドの貨幣をめぐって」であった。

第1回KU-ORCAS研究例会

摂政テモ＝ホトクト晩年におけるサムイェー僧院修繕と扁額賜与の請願について

池尻 陽子 関西大学文学部 准教授

2022年7月30日開催の研究例会において、「摂政テモ＝ホトクト晩年におけるサムイェー僧院修繕と扁額賜与の請願について」と題して報告を行った。18世紀半ばのチベットにおいてダライ＝ラマ八世の摂政を務めたテモ＝ホトクト七世が行ったサムイェー僧院修繕事業について、『ダライ＝ラマ八世伝』やチベット語・満洲語檔案史料を用いてその背景およびテモ＝ホトクト七世の意図を検討した。



第2回KU-ORCAS研究例会

資料紹介：故井上秀雄先生所蔵拓本について

篠原 啓方 関西大学文学部 教授

報告では、新羅史・日韓交流史に多くの業績を残した井上秀雄先生(1924-2008)が自宅に所蔵されていた書籍・資料のうち、朝鮮古代・高麗時代の拓本資料28種(44枚)を目録にして紹介した。これらの資料は戦後、先生自身の調査活動によって得られたもので、大韓民国成立後の新出資料や、北朝鮮研究者の訪問時に得た資料を含んでおり、学術的価値のみならず、現代日韓・日朝の文化交流を示すものとして貴重である。



第2回KU-ORCAS研究例会

18世紀後半～19世紀初頭の北部ベトナムにおける皂隸と村落

吉川 和希 関西大学文学部 准教授

本発表では仏寺や神祠などを維持管理する代わりに各種税役が減免される皂隸に焦点を当て、18世紀末～19世紀初頭の北部ベトナムにおける村落住民の動向を考察し、以下の事柄を指摘した。①黎朝(1428～1527/1533～1789)→西山朝(1788～1802)→阮朝(1802～1945)と王朝交替が起これと、皂隸の村落は新政権に上申し、公的負担の免除の継続を要請していた。②西山朝・阮朝共に一部の村落の要請を認めず、認可されなかった村落は再度政権に文書を発出していた。



第4回KU-ORCAS研究例会

オスマン朝治下のイスタンブールにおける居酒屋にかかわるカラマン＝トルコ語墓誌

澤井 一彰 関西大学文学部 教授

本報告では、オスマン朝の都であったイスタンブールに焦点を絞りつつ、ムスリムと非ムスリムとが長らく「共生」するなかで広範に見られた飲酒行為と、その主たる「場」として機能した居酒屋(メイハーネ)の実態の一端について発表した。

また、その具体的事例として、19世紀末のイスタンブールに生きた居酒屋関係者とされる一人のギリシア正教徒の妻の墓碑を取り上げつつ、そこに確認される複雑な多文化的要素について考察した。



バチカン図書館調査について

関西大学 名誉教授
KU-ORCAS研究員
内田 慶市



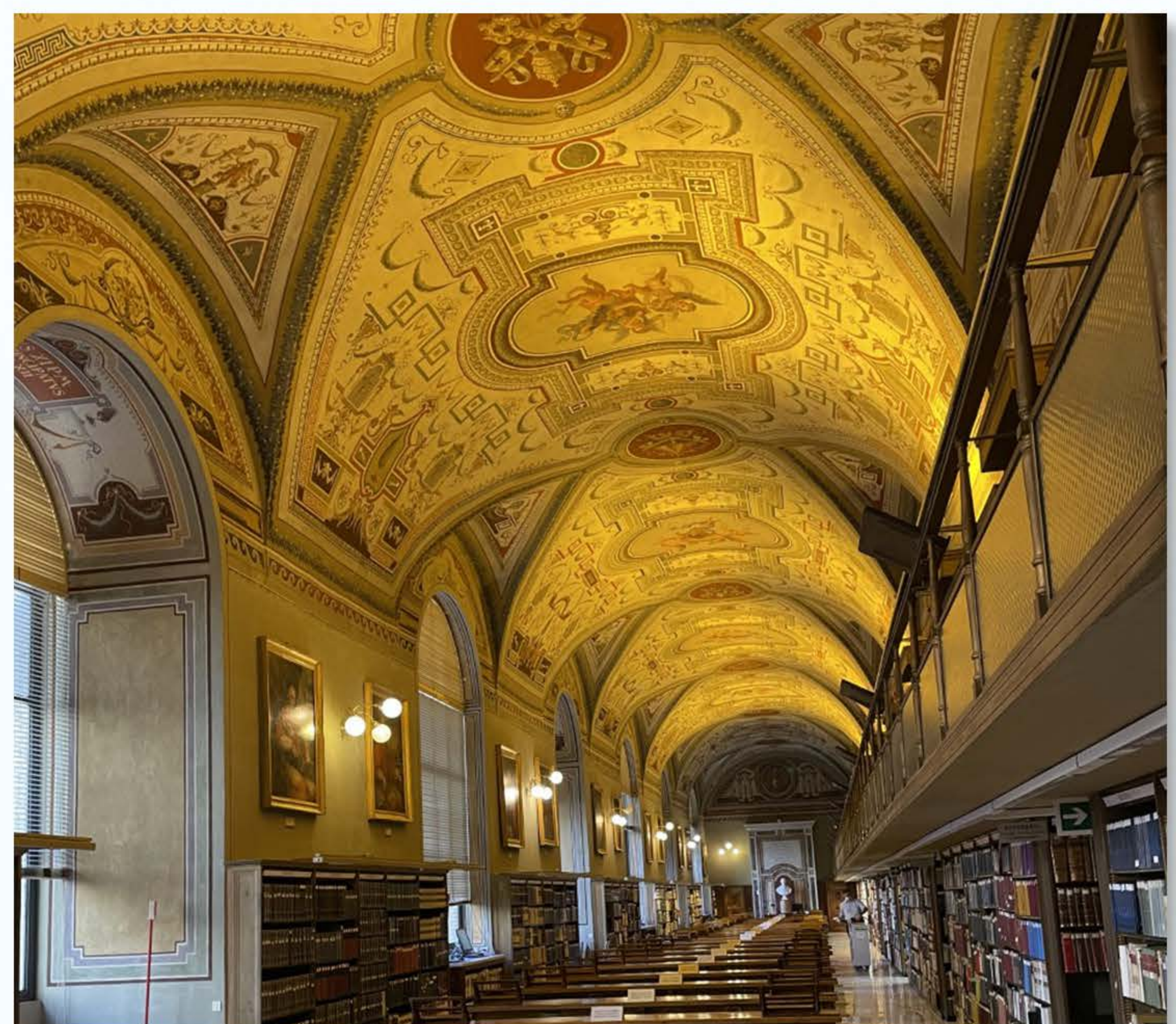
コロナ前は1998年以降毎年夏にはローマ・バチカンに行っていたが、コロナで3年間行けずじまい。ようやく、2022年9月と23年の2月の2回訪れることが出来た。どちらも、KU-ORCAS バチカンプロジェクト、クラウドファンディングに関わってであるが、9月にはそれまで実現できていなかったクラウドファンディングのリターン(「天正遺欧少年使節団の足跡を辿る」)を参加者1名ではあったが実施できた。2月は特に、古写経の専門家による鑑定が主な目的であったが、同時に筆者がこの3年出来なかったバチカン文書館での昭和天皇に関わる資料の調査も兼ねていた。



古写経の鑑定については、落合先生からは、時代は下るものの本物であるという結果が示されたが、同時に、今回、別に見ることの出来た「華嚴経」の2本の写経についても「国宝級」のものであるという見解が示された。この「華嚴経」の存在についてはバチカン図書館東洋部主任の余東氏の目録等にも記載があったものではあるが、現物を見るのは今回が初めてで、今後の詳しい調査が待たれるところである。

昭和天皇に関する資料については、松岡洋右の法王謁見の段取りや服装はどうすべきかといった日程調整に関するものや、東條英機の国会での演説に関するものは取りあえず見れたが、他の資料、とりわけ天皇の開戦や終戦におけるローマ法王とのやりとりに関する資料は今回は時間の都合で探し当てることはできなかった。これも、次回の課題である。

いずれにしても、バチカンとの関係は今後もKU-ORCASの目玉のプロジェクトであることは間違いないものである。



バチカン図書館調査について

国際日本文化研究センター・機関研究員
KU-ORCAS研究員

小川 仁



KU-ORCASが主導するバチカン図書館収蔵日本関係史料の研究は、クラウドファンディングを通して、多くの皆様のご支援を頂きながら活動が続けて参りましたが、新型コロナウイルスの世界的流行のため停滞を余儀なくされておりました。しかしながらwithコロナの機運の高まりを受け、KU-ORCASは昨年9月より、バチカン図書館に赴いての研究調査活動を再開しております。

当該活動における研究対象の一つに、昭和戦前期に活躍した新潟の書家、高橋松顧(しょうこ)が1933年に教皇ピウス11世に献呈した古写経と、古写経の献呈理由を述べた献呈添状11点からなる史料群があります。高橋松顧は献呈添状のなかで、どの古写経も史料価値が高いと断じているのですが、果たしてそれは真実なのか、それを突き止めるべく、日本古写経研究所所長の落合俊典先生と、関西大学名誉教授の内田慶市先生とともにローマに渡り、本年1月30日から2月3日の5日間、バチカン図書館での調査・鑑定を実施しました。

今回の調査における私の役割は、落合先生の鑑定作業のサポートです。長年にわたり多くの古写経を鑑定・研究してこられた落合先生の姿を、そばで見守るばかりではありましたが、悠然と構えて黙々と鑑定作業を進める落合先生の様子を目の当たりにするだけで、今回の鑑定で得られる収穫の大きさへの期待は膨らむ一方でした。今回の鑑定結果は3月24日に開催されたクラウドファンディング成果報告会で、落合先生が詳細に発表されました。鑑定結果はKU-ORCASのホームページでも公表予定です。



国際仏教学大学院大学 教授
日本古写経研究所 所長

落合 俊典



今年の冬、令和5年1月30日(月)から2月3日(金)の5日間、バチカン市国にある図書館を訪問し、話題となっている日本古写経を調査した。昭和8年(1933)12月に新潟の書家高橋松顧氏が教皇ピウス11世に寄贈した日本の古写経は整理されたものは五点だが、すべて『大般若経』(600巻)の部分に相当する。特に最初の1点の平安時代の『大般若経』182巻は、巻首の二紙を失っているが全15紙の写経で分量が多い。これは卷子本であったものを横幅20センチ前後の折本にした形にして保存している。戦前の昭和時代に高橋松顧氏が入手したもののようなのであるが、当時には書画骨董を専門とする日本橋などの店には奈良平安の古写経も市中に出回っていたはずである。名品は然るべき所蔵機関が有するようになった。田中塊堂著『古写経綜鑑』(昭和17年)はその案内書である。高橋松顧氏がどこから入手したか不明であるが、平安写経や鎌倉写経などの経巻を購入することは必ずしも困難ではなかったと思われる。

それらの日本古写経をキリスト教の総本山バチカンの教皇宛てに寄贈したことが稀有なることである。氏の意気込みが贈呈文から強く感じられる。

また、バチカン図書館蔵の元代の写経である紺紙金泥の美しい『華嚴経』巻五十六(折帖、尾欠)を熟覧調査する機会も得られた。これは元の至正五年(1345)年に元王朝の皇帝・皇后・太子のために書写された八十華嚴経である。紺紙に典雅な金字で書かれているが、見返し絵は金彩の優雅な仏画が描かれ、中央の毘盧遮那佛を囲繞する九仏が見事である。宮中の絵師が精魂込めて描いた八十枚のなかの一枚であろう。

元代では普寧寺大蔵経や官版大蔵経が刊行されているが、その他に金字大蔵経も二蔵写経されたと記録に見られる。實叉難陀譯『八十華嚴経』が写経されたことは従来知られていなかった事実であり、仏教学史上また絵画史上において貴重な資料となるに違いない。



関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

No6

KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日 2023年3月27日

発行 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

TEL:06-6368-1834 E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp

